

第4分科会 子どもの発達と環境

テーマ 山がくれた遊具

大阪支部 大塚謙太郎

平成29年度に、大阪府豊中市にある認可保育所の増築工事の中で実施した、檜の銘木を使った木登り遊具について、ご報告します。



▲こどもたちが、檜の銘木を遊具に変える。

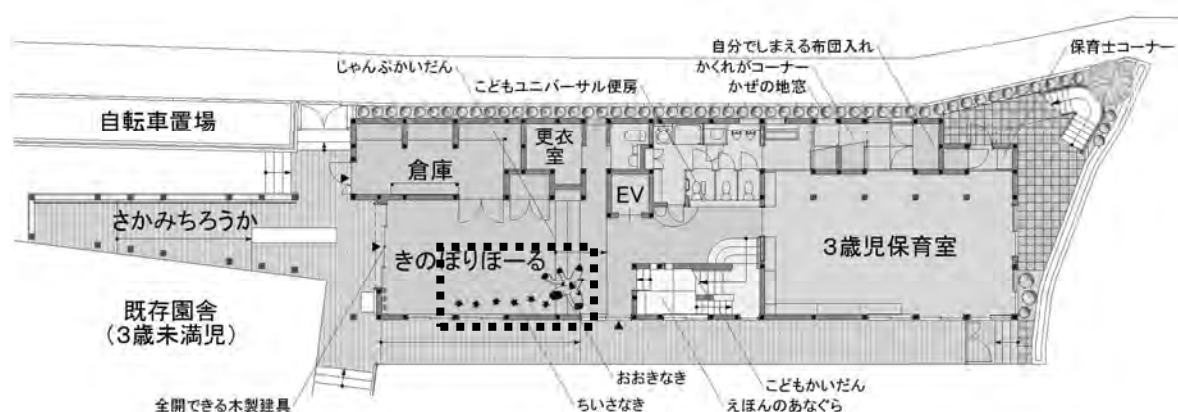
既製品と思索

保育や幼児教育の現場では、遊具もおもちゃも、場合によっては口に入れるものすらも、既製品が使われることが当たり前になりつつある。品質や安全性が向上し、管理する大人が安心して使用できるという側面は、非常に重要なことである。そのかわり、それらについてじっくりと考える機会が失われ、思索のない保育が当たり前になっていく。そちらの方は、必ずしも良いこととは言えないだろう。

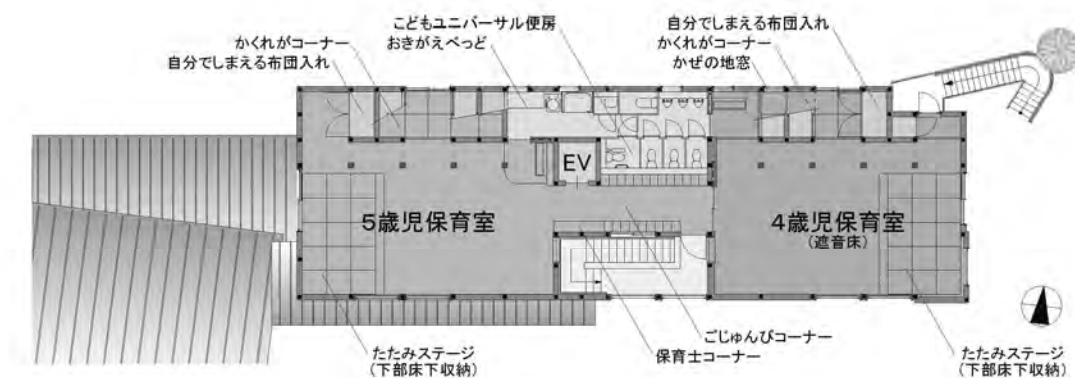
「遊具の安全に関する規準」に従って作られた既成の遊具が保育所では多数派を占めるが、ご承知の通り、この基準の前提は、保護者の監視の下で使う場合ということになっている。親子が1対1で公園の遊具で遊ぶのとは違い、30対1で保育

を行う保育所などで使用する場合は、一人ですべての遊具にしがみつくと子どもたちを監視することはできないであろう。つまり、基準に則った遊具であるからというだけで、安心だとは言いきれないということだ。

新しく購入する遊具を、笑顔の子どもたちに彩られたカラー刷りのカタログから選ぶのではなく、素材を前にして試行錯誤を繰り返しながら創るという機会は、意図しなければ巡ってはこない。それなりの時間と手間、「少々の覚悟」がいるが、いざやってみれば思ったほど難しくはない印象である。



▲ 1階平面図 (Non scale) 破線部分が「のぼり木」



▲ 2階平面図 (Non scale)

山がくれた遊具

かつては、こどもの遊びの代表格のひとつであった木登り。現在の市街地では、町の中に登るべき木がほとんどない。あるいは、あっても枝を払ってしまうので登れない。一方で、保育所の園庭の木々はひよろひよろで、やはり登るに耐えるものがない。それは残念ながら、木を伐ることは大好きだが、緑化条例で縛らねば木を植えることをしない大人の仕業なのだ。木登りは、腕や脚など体全体の筋肉を鍛えると同時に、バランス感覚や、危険を察知し最良を選択する力を育む。そして、何

よりも楽しい。もちろん生きた木の方が良いのは言うまでもないのだが、それが叶わないのなら、ホールに1本だけ、枝付丸太を建てようという提案をさせて頂いたのが、そもそもの始まりだった。

雪の降り積もる、吉野の銘木店へ園長と出かけたのは、正月を目前にした仕事納めの日だった。見たこともないおもしろい形状の木々が所狭しと並ぶ、迷路のような大倉庫に入るや否や、園長の空想は激しくスパークした。接ぎ木用の枝分かれした大きな檜が1本、空中ブランコ用の曲がり木が1本、枝付皮むき丸太が6本。ほーるに1本だけ、という事前の約束は完全に反古にされている。工期・予算・工法・室面積・安全性など様々な心配事がスパークして、少々顔が引きつっている事務長や、現場監督、私ども設計者を尻目に、次々と売約済みの札が貼られていく。おまけで、卵形に削り出した高野槇までついてきた。しかし、その心配とは裏腹に、最後はみな笑顔だった。プロジェクトに関わるそれぞれの立場で、この木々で遊ぶこどもたちを想像できたからに違いないし、こども時代に戻って、木登りをする自分自身を想像したかもしれない。



▲左：皮むきの様子 右：乾燥の様子

育った山から切り出され、乾かされて、銘木店の手で皮むき丸太として整えられた木々たちは、重量運搬業者によって慎重に現場に運び込まれた。たくさんの枝が突き出した檜材を前に、保育者が、施工者が、設計者が一堂に会して、もちろんエンドユーザーであるこどもたちの中から任命された、すばしっこい子代表と、どんくさい子代表にもモニターとして参加してもらい、立て位置はどこがよいか、どの枝を残すのか、頭で考え、登り、ぶら下がって体で試し、安全と冒険の狭間で悩み、決めた。それは、言わばリスクとハザードの仕分け作業だ。何せ相手は、皮を剥いただけの木なのである。当たり前だが、既製品の遊具と違って均質な部分は皆無である。100点満点はあり得ないのだ。しかし、決して90点が許されるわけではない。つい避けて通りがちであるが、その矛盾に満ちた判断こそ、我々大人がこども

たちのためにせねばならないことのひとつであるように思う。その木々を前にして、何時間経っただろう。園長は、少しのあいだ目を閉じたあと、「んー、これでいいです。」と言った。



▲左：施工の様子 右：保育者・施工者・設計者と園児代表が寄って検討する。

その後、大工によって立ち上げられた木々は、家具職人の手によって、危険箇所を丁寧に削って仕上げられた。繰り返しになるが、こうして、様々な職能の大人たちの手を介して、はるばる吉野の山からこどもたちに届けられたのは、ただ、皮を剥いただけの木々だ。

元来、自然物と遊具の境界線というものは存在していなかったのではないかと思うのだが、いつのころからか、遊具は自然物から独立してしまった。自然物より、既製品の方が遊具として優れている部分も多くあろうが、純粹に「おもしろいかどうか」という観点のみでみると、既製品の方が優れているとは一概に言えないのではないかと思う。一定の角度で滑り落ちる滑り台より、斜面の段ボールすべりの方がスリルがあるし、等間隔でバーが繰り返すジャングルジムより、木登りの方が変化に富む。遊具は遊ぶためにあるわけだから、おもしろさで選ぶのが自然だろう。それ以外の、何か別なものを優先して遊具が選ばれているのかと考えると、保育所で主流をなす、色とりどりに塗られた既製品の遊具群が異様に映る。

均質化していく遊具、それとともに単純化されていく遊び。育ちを任せられ、その責任を負わされる現場が、理想と現実の狭間で苦悶しているであろうことは想像に難くない。遊具をカタログから選ばせているのは、実は、保護者をはじめとする園をとりまく社会、つまり大人たちなのではないのかと、私たちは自分自身を疑ってみる必要があるだろう。「少々の覚悟」を現場だけでなく、全ての大人が共有できるなら、こどもたちの生活の場である保育環境が、飛躍的に向上することもまた想像に難くない。皮を剥いただけの木々に、鈴なりにしがみつくこどもたちを見ながら、子を持つ一人の大人として、そんなことを考えた。